

えぬぴおん 創刊号 10.11 月号

2002 年 10 月

特集

学校を地域に開く

「総合的な学習の時間」が今年 4 月から小中学校で始まった。子どもを中心にすえた新しい授業が、学校現場に何をもたらすか期待が高まる一方、どう授業を構成するか戸惑いも生じている。そんななかで、さまざまな市民活動団体が現場の教員と協力して、総合学習を進めている例が増えている。学校が地域に開き、地域がかつて持っていた教育力を取り戻すことで、子どももおとなも 21 世紀の新しい学びをつくりだすことができるかもしれない。特集では、市民活動が総合学習にどうアプローチすればいいのかを考えてみた。

—NPO が提案する「総合的な学習の時間」—

「総合的な学習の時間」って何？

Q1.「総合的な学習の時間」は、いつから導入されたのですか。

A.学校週5日制、教育内容の3割削減とともに、新学習指導要領で「総合的な学習の時間」が本格導入されました。小学校は3年生～6年生、中学・高校は全学年が対象で、生徒全員が学ばなければならない必修科目です。小・中学校は今年4月から全面実施されましたが、高校は来年4月からです。

Q2.「総合的な学習の時間」の創設の趣旨は？

A.新学習指導要領では、以下のように示しています。

(1) 各学校は、地域や学校の実態等に応じて、横断的・総合的な学習や児童の興味・関心等に基づく学習など創意工夫を生かした教育活動を行うものとする。

(2) 指導のねらいとしては、①自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てること。②学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的にとりくむ態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにすること。

Q3.「総合的な学習の時間」の学習内容は？

A.課題としては、①国際理解、情報、環境、福祉・健康などの「横断的・総合的」な課題②児童生徒の興味・関心に基づく課題③地域や学校の特色に応じた課題——をあげています。

また、活動として例示されているのは、

①探求活動／調べ学習を中心とします。その際には情報の収集・処理・発信を行うために、コンピュータやインターネットの利用も計画できます。

②表現活動／各自の学習成果の共有、学習の深化、さらに表現力の育成という観点から、学習発表会や討論活動などを取り入れます。

③制作活動／具体的な体験活動を重視し、実際にものを制作するという活動を取り入れます。全体の流れから、制作する必然性やそのための探求活動も重視します。

④労働活動／ボランティア活動や自然体験の活動など、具体的な体験活動を重視します。

⑤娯楽活動／学習のまとめや発表の場として、集会や催し物等を企画します。ただし、それまでの学習の流れや必然性を重視します。

Q4.「総合学習」の授業時数は？

A.新指導要領では、年間標準授業時数は、小3で105時間（国語235時間、算数150時間、理科70時間、社会70時間）、小4～6は、105～110時間で、いずれも国語・算数について授業時数が多い。中学は70～130時間と幅があります。

授業の組み方は、学校単位、学年単位、学級単位などがあり、時間割りも弾力化していません。

Q5.「総合的な学習の時間」の導入は順調でしょうか。問題点や今後の課題について。

A.順調とはいえません。いくつか問題点や課題を挙げてみます。

①外部から講師や共同研究者を呼ぶなどの予算や人的な支援もなく、条件が整っていないので、十分な総合学習ができない。そのために、現場にゆとりがなくなり、教科学習にも影響が出ている。

②学校内の合意形成が大変だったり、手続きが面倒で、個々の教員の創意工夫が活かされない。

③国際化といえば、「外国語教育」、情報教育といえば、コンピュータ操作への埋没、環境教育は空き缶回収かゴミ拾い、福祉教育は老人ホーム訪問と、パターン化・矮小化している。

④受験学力の視点からとはいえ、学力低下を心配する声も出ている。

今後の課題としては、①教員は教育の専門家として、自らの専門分野の指導力の向上とともに、教育課程編成全体にわたる視野が求められている②教科学習と総合学習は車の両輪、両者の有機的関連づけが必要。

Q6.「総合学習」で学校教育は再生できるのでしょうか。

A.現場の困惑や「学力低下」批判のなかでの文部科学省の揺れ、一部の校長の「この制度は長く続かないから、カリキュラムの変更は最小限に」といった対応など逆風も強まっていますが、学校の創意に委ねられた学習内容、子どもが主体の学習方法、点数の評定を付けないなど、この制度の意義を過小評価はできません。みんなで総合学習を成功させ、教育改革につなげていくことがいま、もっとも大事ではないでしょうか。

身近に体験する自然エネルギー

北海道地球温暖化防止活動推進員 上川地区 家次敬介

昨年より北海道の任命による地球温暖化防止活動推進員制度が動き出し、全道各地で 28 人の推進員が活動しています。個々にいろいろな活動推進をしていますが、私は自分の専門分野を生かし、環境イベントを行ったり、学校の授業でソーラー発電システムやソーラークッカー（太陽熱で料理を作る調理器具）、小型風力発電機の貸し出をして製作や組立て、設置をして実際に使用してみせるというデモンストレーションを行っています。

今年から本格的に実施されている小中学校の「総合的な学習の時間」で、環境が授業のテーマとして取り上げられるケースが増えてきていますが、専門知識を必要とするばかりか準備などが大掛かりになりがちで、生徒にどの様に指導してよいのか不安を覚える先生方も多いと思われます。そこで、授業の内容や子どもたちの様子を紹介したいと思います。

ソーラークッカーでピザを焼く

環境の授業に私の自然エネルギー機器を利用している先生は、中富良野町立宇文小学校の仙庭裕美先生です。担任をされている 3・4 年生の 9 人の子ども達に、支柱を立てる穴を掘ってもらい、本体の組立てや配線などの作業を手伝ってもらって、小型風力発電機（最高出力 130W）を設置しました。

風を受けて回り出した発電機から電気をうけて、小型テレビを見たり、運動会の放送用アンプの電源に使ってもらったりして、自然エネルギーの現実性を体験してもらいました。また古い使用済みのパラボラアンテナ（アナログ BS、CS アンテナ 100cm を多く使用）を利用したソーラークッカーを子ども達と一緒に製作して、ピザを焼いて、おいしい自然エネルギーを体験してもらいました。

年間テーマを決め、学芸会で総仕上げ

この先生の授業がすばらしいのは、年間のテーマを決め、そのテーマに関して 1 年間定期的に授業を行い、その中に実習を組み込み、学芸会での劇で結果を報告しています。この年のテーマは「エネルギー」で、エネルギーの種類や特徴を学び、自然エネルギーを実際に体験し、学芸会で「青い地球は誰のもの」という題で劇を発表しました。題のとおり今は好き勝手に地球を汚しているけど、本当はみんなのもので、勝手に汚してはいけないという内容の劇をみんなで演じることで 1 年間の環境授業の総仕上げをしています。

この授業を通して「先生、僕大きくなったら自然エネルギーの技術者になるよ」と言ってくれた男の子がいたそうです。そんな話を先生に聞いていると本当にうれしくなり、私の実

習もついつい力が入ってしまいました。

曇りで半日がかりのピザ焼き

また、今年は札幌市の拓北養護学校の生徒と近所の子ども達の地域交流を目的とした「デイキャンプIN TY」に参加させていただきました。午前中はソーラークッカーの製作をし、お昼にピザを間に合わせる予定で作っていましたが、朝から晴れていたにもかかわらず、完成した頃には青い空がすっかり雲に覆われて一枚焼くのに半日かかってしまい、みんなに食べてもらう事ができませんでした。でも、太陽エネルギーの凄さを実感できたと思います。午後からは風力発電機を組立て、みんなでテレビをみました。

このように上から押し付けるのではなく、遊びながら自然に身に付く様な取り組みが各地で始まっています。私たち地球温暖化防止活動推進員はそんな地域の活動を一生懸命応援いたしますので、お気軽に各支庁の環境生活課にご連絡ください。

自然豊かな農村づくり

湿地ビオトープにおける環境学習

栗山町ウォーターリフォーム会

水質浄化と湿地ビオトープの復元をめざして、ウォーターリフォーム会が4年前に発足した。さまざまな職業を持った町の人で構成するこの地域のボランティアグループが、水質浄化装置を活用した環境学習を学校と連携して行い、学習のコーディネーター役を担っている。その活動は自然豊かな農村づくりへとつながっている。

トンボが群飛する自然の回復をめざして

南空知の栗山町南角田地区、もともと水田だったところに水質浄化施設が造られた。ここが湿地ビオトープとして、近くの栗山町立継立小学校の総合学習の舞台になっている。

農村地帯からトンボや生き物が減ったといわれて久しい。それは田んぼやため池などが減っていること、河川や沼が汚染されていることなどが原因だ。ここ南角田地区でも、用水に利用している水路の汚染による窒素過多で水稻の障害が発生していた。汚染の原因は、畜産廃棄物や肥料、農薬、家庭雑排水が川に流れ込むためといわれている。

4年前に発足したウォーターリフォームの会(高橋慎代表)は、空知支庁南部耕地出張所、道立中央農業試験場と協働して、浄化施設づくりをすすめた。

この浄化施設は、植物法と礫間接触酸化法を組み合わせたもので、植生ゾーンにイネやヨシを植え、そのフィルター効果で汚染を除去するのが前者。後者の礫間浄化ゾーンは、レンガや砂利を充填したコンクリートプールで水質浄化をする。浄化能力は調査途上だが、今のところ一定の効果が確認されている。

ビオトープが総合学習の舞台

植生ゾーンには浅い池も設けられ、湿地ビオトープとして大切な役割を果たしている。ビオトープとは、いろいろな生き物がお互いに関係を持って暮らしていける空間のことで、草地や川、森など生き物がいっぱいいるところ。

継立小学校の子どもたちは、ここで総合学習を行っている。まずは米作りを体験するための田植え、草取り、稲刈り学習。3年生から6年生までの60人程の子どもたちが参加して、農業への理解と環境保全の意味を学んでいる。そして、子どもたちは自主的に課題を決めて、水質、動物・昆虫、植物の3グループに分かれる。水質グループは、いろいろな器具を使って水質調査をして、植物の有無によって汚れの差があるかを調べたりしている。植物グルー

プや動物・昆虫グループは、それぞれどんな動植物がいるかなどを調べている。

子どもたちは「ホタルが住める田んぼにしてみたい」「よごれた水はレンガと小石と炭できれいにするといいと思った」などの感想を寄せている。

地域と学校の緊密な協力・連携が大きな効果

継立小の総合学習の特徴は、学習のコーディネーター役を地域のボランティアグループ「栗山町ウォーターリフォーム会」が担っていることである。環境学習に際して、農家や水質の専門家、動植物に詳しい住民を先生役として派遣し、生きた教育を実施しているのだ。

ともすれば、互いに遠慮があり、それぞれの主体性が発揮できない、学習のねらいの共通理解が不十分、新たな計画の判断がすぐできないため毎年同じ内容の繰り返しなど、学校と協力機関との連携上の問題が起こりがちだ。しかし、継立小では学習のねらいを明確にするため、会と農業試験場、学校の三者会議を開いて、情報を出し合い、環境学習を深め、さらにそれぞれの学習への思いを交流し、具体的な協力内容や指導の留意点などを明らかにした。まさに、地域と学校が一体となって取り組んできたといえる。

指導についての事前の打合せで、子どもの質問にすぐ答えを教えるのではなく、自分たちで答えを見つけだすその方法を教えるというように、専門家の姿勢が変わってきたのも三者会議の成果だ。「BOD についてもっと調べたい」「これからの環境保全のあり方について勉強したい」など子どもたちのなかに自発的な学習意欲が生まれつつあるという。

里山づくりも始まった

また、同町ハサンベツ地区では、20年後の森づくりをめざして、ハサンベツ里山計画がスタートした。ハサンベツ川に沿って沢に入っていく細長いハサンベツ地区は、かつて農業が営まれ、里山環境を育んできた。しかし、離農が進み、耕作放棄地になって、ゴミ捨て場と化し、帰化植物の侵入地となって、自然環境は破壊されるままになっていた。

町がその一帯 24ha を購入し、再び自然と農業と人が共生する里山として、再生・創出をめざしていくことにした。それがハサンベツ里山計画だ。実行主体は町民。町民が知恵と労力を使って、里山づくりを進めている。

先のウォーターリフォーム会をはじめ、町内の自然保護団体が中心になって、ハサンベツ里山計画実行委員会が昨年7月、立ち上がった。すでに昨秋から、ホタル・トンボ水路の整備、子どもたちが遊べる小川の造成、湿性植物繁殖地の造成と移植、雑木林の復元、ビジターセンターの建設などを行い、今後、水車小屋づくり、体験田んぼ・畑づくり、野鳥生息地の復元、雑木林の手入れと炭焼きなどを計画している。ビジターセンターは町民の募金や助成金だが、それ以外の作業は構成団体が全部自費で行っている。

自然を守る生き方を

ここは子供たちの体験学習の場でもある。昨年9月、栗山小の1年生90人が魚とりと川づくりに参加した。今年6月には、2年生になった彼らが川づくりをした同じ場所で生き物観察を行い、ドジョウやスジエビ、ヤゴが戻ってきたことを喜んだ。7月には栗山小5年生100人がカミネッコン（※）による植樹と川づくりを行った。

ウォーターリフォーム会代表の高橋さんは、「私たちは、何のために勉強するのか、目的を見失っている。いい大学を出ていい会社というコースも破綻し、価値観が崩れている。体験学習を通じて、どう暮らしていくのか、自分でテーマを見つけて、考え、行動していく方法が身に付くと思う。里山づくりを通じて、自然を守る生き方を地域の人たちと子どもたちに広げていきたい」と語っている。

再生紙育苗ポット [カミネッコン]

カミネッコンは再生紙でできた型枠です。組み立てたカミネッコンをポットとして、中に培養土を入れ、苗木を入れたり、挿し木をします。それを地面に置くだけです。植えたい場所の中心にミズナラやハルニレ、そのまわりにヤナギのポットを組み合わせて置くと、苗木は互いに成長を助け合いながら、ゆっくり強く育ち、自立したいろいろな木々が共生して森になります。ポットは風化して土に戻ります。

総合学習で地域のお年寄りとふれあい交流を

教室では学べない体験を通して

インタビュー NPO 法人北海道アイディアランド協議会 代表 谷口喜好さん

世代間交流のできるふれあいの広場として

札幌市西区 JR 八軒駅高架下にある「生きがいの館」。そこは NPO 法人北海道アイディアランド協議会のメンバーが建てた手作りの城。高齢者の夢と生きがいの発信地であり、八軒地域の子どもたちが気軽に立ち寄れる世代交流の場にもなっている。さらに今年 4 月、同協議会は小中学校の週休 2 日制にむけ、地元の大人たちのサポートを受けて「八軒夢子どもクラブ」を発足。また総合学習の場面でも、日頃の世代交流を生かした体験の場面を提供している。

同協議会は、①手作り品を得意とする主に女性メンバーの「札幌シニアドリームクラブ」、②大工、建具職の技術をもった男性仲間の「札幌シニア DIY」、③仲間づくりを主とする趣味的活動の「生きがいの会」、④八軒の子どもたちを中心とした全国組織の発明クラブのひとつ「八軒少年少女発明クラブ」の 4 つで構成されている。

文字通り、高齢者がもてる能力を活かした社会貢献をすることを生きがいにする夢の発信地であり、また地域の子どもたちの育成と地元と力を合わせた三世代交流ができるふれあいの場でもある。

「八軒夢子どもクラブ」は、学校を離れた子どもたちを地元で支えようと発信したもの。生きがいの館の一角に子どもたちのクラブ室を作り、児童書やパソコンを置いた。

活動は週 1 回の土曜日の午前中を使って、昔遊びやお年寄りの話を聞く会、夏休み中には、発明教室、親と子の見学会などを企画開催してきた。

近隣の琴似中央小、八軒小、八軒北小などとはすでに 3 年ほど前より交流がある。クラスや学年単位での社会科見学はもとより、運動会や学習発表会などにはお年寄りにぜひ来てくださいとのご招待もあり、日頃から自然な形で接している。日曜日などの休みの日には、「生きがいの館、に「水のませて～」と言いながらふらっと気軽に子どもたちが立ち寄るといふ。

代表の谷口さんは、現在の活動をするまでは長年の小学校教諭のキャリア。

若き教師時代から「発明先生」の名で知られるアイディアマン。教員退職後の難病の病床でひらめいた地域みんながふれあえる「生きがいの館」が、夢でなく現実となり、谷口さん自身のライフワーク、生きがいにつながっている

子どもとの関わりもずいぶんと長い。地域や子どもたちに向ける思いも人一倍だ。夢とアイディアにあふれる谷口さんに NPO として総合学習に提案したいことを伺った。

総合学習の時間に地域との結びつきをとりいれて

お話 谷口 喜好さん

3年ほど前から、八軒近隣の小学校の先生たちが7名ほどいらっしやっています。総合学習で地域との結びつきを取りいれたいが、どう進めたらよいかという相談でした。

私はまず、館での子どもたちとお年寄りの交流からいきましょうと提案しました。大工仕事の得意なシニア DIY クラブや、女性たちの手作りの「シニアドリームクラブ」の活動がありますから、まず子どもたちにその活動を見てもらうことにしました。

そのうち、今度は学校での子どもたちの姿をお年寄りたちに見に来てほしいということになりました。そこで20名ほどのお年寄りが年4回ほど学校へ行き、一緒に給食を食べたり、お年寄りに教わって竹細工や木工作、毛糸や布を使った工作（ものづくり）体験と交流の場をもつことができました。

なるほどと感心したのは、子どもたちが「お年寄りが必要とするマップを作ろう」という課題を持って「生きがいの館、にやってきたときのことです。子どもたちはお年寄りにインタビューをしながら「地域の中で何を望んでいるか」、一生懸命探っていました。

「お寺はどこ?」「具合が悪くなったときのために病院も大事だね」「買物はスーパーかな」「散歩して一休みするベンチも必要だね」というように、自分たちでグループになって実際に地域を歩き、お年寄りの声を聞くことで心に刻まれ実感する。これは、教室では学べない心と体で覚える貴重な体験（学習）ですね。

子どもの発想を自ら引き出す総合学習を

総合学習の場面で私たちができるのは、今まで関わりあったお年寄りと子どもたちのつきあいをどう発展させるかですね。子どもたちが自ら「ああしたい」「こうしたい」という気持ちを引っ張り出せるようなものにしなくては。

先生たちがお悩みの種の指導計画にしても、初めはイメージをいくつか思い描いて次に具体的に落とししていくことです。そして目標実現にむけて具体的な計画を立てること。初めに1年、そして1か月、そして1週間、一日の流れ…というように。必要があって目標→計画、そこに独自の発想を織り込んでいきます。

私が NPO の設立から大事なこととして自分に言い聞かせてきたことに、「発想の転換」というのがあります。まず考えること、そして行動に移すこと。考えたことを行動に移すときに普通の考え方を横やななめから見ると、何が足りなくて何が必要かということがわかってくる。

子どもたちには、基本原理はしっかり教えますが、あとは子どもたち自身に任せます。「こ

「君はどうしたらいいの？」に対して何から何まで教えるのでは考える力が育ちません。「君はどうしたいの？」と子どもの発想を引き出すことが大事です。

心と体を使った体験が子どもたちの貴重な学びに

発想する力という点では、「ものづくり」は有効だと思います。子どもが何をしたらいいかわからないとき、素材を渡す。子供は素材を眺めてあれこれ考えます。ちょっとしたアイディアも悩んだことも失敗も全て体験につながっていくのです。

DIYクラブのお年寄りも、ぐらぐらする机などの直しは好きにお願いしています。板切れや廃材を利用して工夫して直してしまいましたが、それも過去の能力プラス現場での体験を重ねて覚え、何にでも応用が利くようになっていたということですね。知識だけではだめ。体験こそが学びなんです。

今の親たちは、あれもダメ、これもダメと先取りしてしまって、子どもたちが自分たちでできることにどんなことがあるか、考えるチャンスも体験するチャンスも与えない。

子どもたちに夏休みの工作コンクールに出す作品を作ってもらいました。与えられた素材は同じでも、自由に素材を使って発想しながら作ったものはどれとして同じ物はありません。ものづくりをする子どもたちの目はとてもいきいきとしています。

総合学習も同じだと思います。教科書以外は、心と体で覚えることです。それが地域学習であり、その体験が子どもたちの身近にあることが大事なんです。

NPO 法人北海道アイディアランド協議会「生きがいの館」

札幌市西区八軒東2丁目（JR八軒駅高架下）

TEL700・3901

開発教育と「総合的な学習の時間」

北海道開発教育ネットワーク（D-net）がめざすもの

D-net 小泉雅弘

開発教育って何だ？

開発教育（Development Education）の出発点であり、中心となる課題は「南の国々の低開発」という課題です。貧困や飢餓、内戦や紛争、難民の発生、自然災害、人権侵害など、人間らしい生活を脅かす様々な困難が同時代を生きる人々に襲いかかっています。実際に途上国の現場におもむき、事態の深刻さに直面した NGO 関係者や市民が、自国の市民や子どもたちにその実情を伝え、これらの問題の解決に向けての参加を働きかけるところから開発教育と呼ばれる取り組みは広まってきました。

しかし、忘れてならないのは開発教育とは単に「貧しいかわいそうな人々を救おう」というキャンペーンではないということです。なぜなら、こうした困難の南の国々への集中の裏側には「先進国の過剰開発」の問題があるからです。「南の貧困」はそれ自体が単独で存在するわけではなく、その原因の多くは長年にわたる植民地支配や今なお続く資源の収奪、経済的搾取といった北の国々との構造的な関係性の中で生まれてくるものです。グローバリゼーションが進展する中、南北の格差は縮まるどころかますます拡大しています。この圧倒的に非対称な世界のあり方を変えていくために、望ましい開発のあり方を考え、具体的な行動へと結びつけていくことを目的とした教育活動が開発教育です。

開発教育においては、学習と実践は異なる 2 つの事柄ではありません。世界の実情を知ること、問題の所在に気づくことは、問題解決に向けての取り組みの出発点であり、また、問題解決に向けての実践はあらたな気づきと学習をもたらします。開発教育とは教室の中で完結する類の教育活動ではなく、現実の世界との接触の中で、自らの生き方や行動を問い直していくようなダイナミックな学習の過程なのです。

NGO と学校現場との連携を

北海道においても、様々な形で途上国とつながる国際協力 NGO が少なからず存在しており、団体間のつながりも徐々に形成されてきています。そして、これまで個々に開発教育に取り組んできた NGO 関係者や教員有志の間で「開発教育についての理解を深め、広めていくためにネットワークをつくらう」という話がかちあがり、今年 4 月に有志が集まって「北海道開発教育ネットワーク（D-net）」を立ち上げました。D-net のねらいは、開発教育についての理解を深め、それを広めるとともに自分たちの地に足のついたものにしていくこと

ですが、そのための重要な鍵は NGO と学校現場との連携をつくりだしていくことにありと
考えています。

グローバルな視点から未来のあり方を考え、行動していく市民を育てていくことは今後
ますます重要になってくると思います。「総合的な学習の時間」をどう評価するかは、何よ
りもそこでどのような教育がなされていくかにかかっているのではないのでしょうか。学校
内の教員のみならず、様々な課題と格闘している市民との共同作業によってその内容を練
りあげていくことができたなら、学校という場にもこれまでにはなかった新たな可能性が
出てくるでしょう。

理科・科学技術の専門知識を総合学習の現場で活かして

インタビュー 北海道技術士センター 北越正生さん

理科や科学の専門知識をもった「技術士」が教育現場にやってくる。北海道技術士センターの「リージョナルステート研究会」は、北海道の自律と活性化を進めるために積極的に社会に働きかけようと 4 つの分科会を作って活動している。自然科学教育分科会のメンバーである北越正生さんにお話をうかがった。

地域とコミュニケーションする新しい技術士像を

「技術士」は、技術士法に基づいて行われる国家試験に合格し登録した人にだけ与えられる称号。科学技術に関してその人が高度な応用能力を備えていることを認定するものだ。

一般に「技術士」は企業の間人というイメージだが、技術士センターのリージョナルステート研究会は、他団体や組織との連携、そして技術士としてコーディネイトの役割を社会に積極的に働きかけて「新しい技術像」を目指していく。

同研究会は、①自然科学教育分科会②観光分科会③循環技術システム分科会④自立的地域構造分科会の 4 つに分かれて活動している。

北海道の自然環境を理解し、受け継いでもらうために

北越さんが、所属している自然科学教育分科会での活動を伺う。この分科会には約 20 名の技術士がメンバーとなっており、会の目的は、①北海道の最大の魅力である自然・環境の大切さを体験しながら理解してもらい、それを地域の重要な財産として受け継ぐとともに、上手に利活用していく心を育てる②自然科学、科学技術の面白さ、奥深さ、大切さを分かり易く教え、北海道の地域産業の活性化を支える技術者を目指す人材の目を育てる一こと。

同分科会でのサポート内容は、小学校中学年から中学校程度を目処とし、

○生物系（北海道の生き物に関係すること）…川にすむ生き物・水の話・森林のしくみ・森にすむ生き物

○地学系（北海道の土・石・山・川に関する事）…地形のできかた・地形の見方・地盤のしくみ・河川のはたらき・土と石のしくみ

○食物系（北海道の農業に関する事）…植物の生育

○エネルギー系（北海道のエネルギーに関する事）…電気のはなし

○都市・町・村系（北海道の街づくりに関する事）…街づくりのはなし

○物理系…力のはたらき

○いやし系…昔のあそびのはなし

一などがある。

国際的な環境科学プログラム GLOBE の外部講師として

実際の活動として、平成 12 年までに小中学校などの教育関係者との懇談や現場での実践、北海道教育大学札幌校の公開講座「環境学習のすすめ方」などのサポートを行ってきた。

「教えること、話すことは素人ですが、技術士として自分の思いや情報をゲストティーチャーとして力説しています。理科教科の応用として進めています。そこで学んだことが今すぐじゃなくても、時間がたって“ああ、あの時あんなふうに教えてもらったな、と体験として子どもたちの中に残っていけばいいと思っています。」

北越さんが関わった札幌聖心女子学院の事例を紹介していただく。同校は、国際的な環境科学教育プログラム “GLOBE” の活動に取り組んでおり、北越さんらは、その外部講師として活動に参加した。

GLOBE プログラムは、地球環境の学習に取り組む国際的な環境教育プログラム。アル・ゴア米国副大統領（当時）によって提唱され、1994 年のアースディ（4 月 22 日）に活動が始まったもの。米国商務省海洋大気庁や米国航空宇宙局を中心として事務局が組織されている。

99 年 2 月現在では、世界 70 ヶ国以上がこのプログラムに参加しおよそ 6000 校が活動しているという。

自ら学び体験する喜びを

札幌聖心女子学院は文部科学省のプログラム観測モデル校の指定を受け、GLOBE 観測・調査・研究グループとして大気・河川水質・樹木の大气浄化能力調査・フェノロジー（生物季節）・酸性雨（雪）調査を行っている。

北越さんらはこの研究グループの精進川での自然観察会・水質調査に外部講師として加わった。精進川は建設省（当時）が進める「多自然型川づくり」の先駆的な河川。積ブロック護岸をあえて再改修し、自然に近づけている。

「子どもたちには、川はどこへ流れていくのか、私たちの暮らしに不可欠な水の話、大気、雨、川の循環から、汚れた川の流れが滞るとどうなってしまうのかなど問いかけ、環境問題として自然の自浄回復能力の話などをしました。」

札幌聖心女子学院では、総合学習的な活動を以前から取り組んでおり、そんな中で実現した企画。

「この学校の中学 3 年生の課題研究を拝見したことがあります。テーマの広さ、内容の充実度で目を見張るものがあります。」と北越さんは語る。

今後は、技術士の専門知識をもって総合学習の場面での活動も増やしていきたいという。

「子どもたちと一緒に学びながら、「学習」の楽しさ大切さを再確認しました。いくつになっても学習は必要なんだなあというのが実感です。学習はノルマじゃない。自らが自発的に学んだり体験する喜びを覚えてほしいものですね」。

(社) 日本技術士会北海道支部 北海道技術士センター
札幌市厚別区厚別中央1条5丁目4
TEL 011・801・1617
FAX 011・801・1618

NPO と教師で創る総合的な学習

学校現場の現状と NPO の受け入れについて考える

インタビュー NPO 法人ボラナビ倶楽部 森田麻美子さん

総合学習の時間が導入され、現場の先生たちはどんな思いで進めているのだろうか？新しい指導計画の中で戸惑う場面もあるのではないだろうか？

今年 6 月、そんな学校現場の現状を知り、問題点を出し合おうとボラナビ倶楽部が教員や NPO に声がけして、「NPO と教員で創る総合的な学習」研究会を立ち上げた。

この研究会では、市内の小中高校に向け、現場での問題点などをアンケートするほか、ボラナビ倶楽部単体では NPO 団体に向けて総合学習をどう思うか、地域でどうバックアップしていけるか…などアンケートを行った。

ボランティア「よくばり体験」で見た中学生のやる気と実践力

昨年 9～10 月、生涯学習ボランティアの振興を目的に文部科学省の委託事業として行ったボランティア「よくばり体験」。主催はボラナビ、北海道 NPO サポートセンター他をメンバーとする同実行委員会。

ボランティアの受け入れ先は、札幌チャレンジド、チェルノブイリへのかけはし、自由学校「遊」、在宅支援サービスホーム「花凧」、景観プロジェクトなど 10 団体。応募の対象は年齢問わず、誰でも参加できた。

「その中で、北広島の「花ホールスタッフの会」のボランティアに参加した中学生が、クロークや入場券のもぎり、バーコーナー、ホールの裏方などの仕事を体験し、とても勉強になったと喜びの声をいただきました。また受け入れ側のスタッフも子どもたちの一生懸命さに感心したと感謝のお言葉をいただきました。」

中学生の可能性を大きく広げるチャンスになったと森田さん。それをきっかけに、ボラナビでは今年の夏休みに、中学生と高校生を対象としたボランティア体験を企画した。

中学生には子育て関連団体の協力を得て、乳幼児の保育や学童保育ですぐす小学生やハンディのある子どもたちの遊び相手を体験してもらい、高校生には、障がい者や高齢者を対象としたボランティアを体験してもらった。

知的障がいのある仲間たちとともにスポーツを楽しむ「スペシャルオリンピックス日本(SO)」の水泳コーチもそのひとつ。ボランティアのあとには、ひとまわり大きくなった子どもたちの姿があったにちがいない。

「これで子どもたちが、地域の中でふれあってボランティアができることや、市民活動団体や NPO は子どもたちを受け入れる体制がとれるということを実感しました。」

総合学習は地域全体で一教師たちへの支援も必要

それでは実際に、現場の先生たちの抱える問題点とは？また NPO 団体は総合学習をどう捉えているのだろうか？アンケートの結果から、気になる部分を森田さんから教えていただいた。

札幌市の小中高、養護、高専など 102 校からの回答で、気になる総合学習の進め方については、「校外からの講師を招いてというのが 9 割ありました。その内容は、福祉・国際交流・地域関連が多かったです。」とのこと。

「先生が抱える問題として、まず情報がない、相談する窓口や知り合いがない他、謝金や交通費の問題が大きく、ポケットマネーで出している先生もいました。関わってくれる人材の分野別・エリア別・謝金の有無・条件などのリストや実践校の事例集が欲しいという要望もありました」。

総合学習を実際に行う NPO や教師へのバックアップは必要だと森田さん。

「相談を受ける場所や、NPO や市民団体と教師が顔合わせができる場が必要ですし、継続してできるようにするには、情報提供する事例集やそれを媒体する機関も必要でしょう。また、教師自身の研修もやらなくては。リストができたところで講師を呼ぶ前にまず教師自身がどういう流れにするか、目的を見直し海外協力、福祉、環境などについて学ぶ必要があります。」

総合学習に向かう教師たちを孤立させず、地域や NPO、市民団体と結びつける NPO 法人もあり、情報を提供できるようにしたいと森田さんはいう。

積極的な NPO の関わりを

また、NPO 団体にむけてのアンケートでは、回収したもののうち、分野では福祉系が多くその約 9 割が総合学習に関心があり、8 割が関わりたいと答えているという。問題点については、教師と同じように時間や報酬、経費などの問題がある。NPO 団体では財政負担を心配する懸念を抱えている。内容・教材の準備期間・対応するスタッフ確保も必要だ。

さらに回答の中には「講師にお任せおんぶという依存する総合学習では困る。生徒や先生と目的をはっきりさせて作り上げていくものを」という意見や、「先生も NPO についての事前勉強をしてほしい」「学校が地域に開かれた施設にならないと、外部の人との交流は絵に描いた餅におわってしまう。どうやってこじあけるか、その方法も議論することが前提だ」など厳しい意見も出されていた。

詳しい内容やアンケート結果については、今年冬ごろの「月刊ボラナビ」掲載に向けて倶楽部が製作中なのでそちらを見ていただきたい。

森田さんはこれらのアンケートやボランティア体験の成果を通して、地域の NPO の力を

生かし、総合学習をバックアップする事業をおこしていけたらと抱負を語る。

「NPO 団体の人には目的をもって目を輝かせている人が多い。子どもたちには、こんな生き方も OK なんだ…と教科や枠にとらわれず、たくさんの人の生き方に触れて欲しいです。それには自分の周りや地域で活動している人をみすごさず、積極的に関わっていくことが大切ですね。」

演劇やダンスを総合学習の教育プログラムに

インタビュー 初代コンカリーニョ事務局長 斎藤ちずさん

演劇やダンス好きのメッカであった西区琴似の「初代コンカリーニョ」が8月のファイナルパーティをもって幕を閉じた。立地地区の都市再開発計画に基づき活動を休止したものの、現在再生をかけてNPO法人設立を進める新プロジェクト（「おらがコンカリPROJECT」）を発足した。「アートとまちを結ぶ」NPOを目指す事務局長の斎藤ちずさんに、総合学習に向けての思いを伺った。

学歴社会は大人の意識改革を

私には中1の娘がいますが、現行の5教科優先の受験制度を意識した学習の仕方では生きる力はないと思っています。大人自らが学歴社会離脱の意識に変わっていかなければ、子どもはいつになってもきつい思いのままです。

私は、演劇やダンスは教育に生かせると考えています。子どもたちが生きる力を自ら発見する方法がそこにあるからです。

演劇にはコミュニケーションをとるための有効なプログラムをたくさん持っているものが多いです。私自身、一般社会に向け、稽古の現場で進めていく中で、互いのコミュニケーションを豊かで、しかもスムーズにすることを実感しました。

またダンスは、言葉を介在させなくてもダイレクトに体に訴えるもの。

なにものにも制限されず、個として感性を解放させ、日常生活からさえも解き放してくれます。

言語というのは、言葉で物事を既定してしまっていることが多い。コップという名前をつけると、コップという個体がコップという概念以外のものには見えない、感じることをやめてしまうから。

子どものダンスワークショップで、言葉を理解するのが苦手な障がいのある人と一緒にダンスを行う場面がありました。即興的に感じるままに体を動かして作って踊るのですが、集中力も素晴らしく、最初の1分は驚くほどいい作品でした。

美術の可能性を広げて

7月末にコンカリーニョで子どもたちを集めて「巨大壁画を描こう」という企画を行いました。

3日間トータル198人の子どもたちが体中、絵の具だらけになって製作に取り組みました。ただ紙の上で絵の具まみれになってはしゃいだり、暴れているだけに見える子もいまし

たが、その痕跡を残し、どんどん色を重ねていく作業に皆夢中になっていました。

総合学習の場でも、芸術家 5 人ほどプレゼンテーションして、子どもたちは好きな先生のところで一緒にワークを一というのをやったら面白いと思います。教材としての美術がぐっと身近で楽しいものになるでしょう。

芸術家の作品の芸術価値と、それが教育プログラムとしての社会の中に有効かどうかは別問題。プレイヤーとして一流でもトレーナーとしては一流ではないかもしれません。けれど、子どもにとって必要なのは、“その子の人生を大事に思ってくれる大人が一生懸命になってぶつかってきてくれること、なんですから。

プロセスこそが総合学習

学校現場の演劇をやる場面として学習発表会というのがありますね。ところが、現状は芝居をほとんどみたことのない先生が役づくりも振りつけも決めて、最終的に形にするための作業に追われているのではないのでしょうか。

それよりも大事なのは、時間がかかっても子どもたちとたくさん話し合っってチームワーク作りに役立つよう組んだり、のびのびと自己表現できる場を設定することだと思います。

例えば、私ならこうです。おむすびの役をする子に向かって「君たちはおむすびになったらどうする？」

すると子どもは「えーっと、おむすびは食べるものだから」「食べたら元気になるから…」と想像力を働かせ、自分がおむすびだったらどうかと自分自身で動きを発見してアイデアを出し作っていく。

友達と意見がぶつかったら、A か B かと多数決やジャンケンできめるのではなく、A と B を練って合わせて C の案を作ってみる。A でも B でもなく飛び越せるのが芸術。もっともめろよと私は言いたい。そんな風に芝居を作っていくプロセスこそが大事なんですね。

総合学習も同じ。結果は求めず、与えて教えるのではなく、子どもたち自身が発見していくプロセスこそが総合学習といえるのではないのでしょうか？子どもたちが生きていく世界は広い。他者との関わりの中で知らないことがたくさんあるということを自ら発見し、実感してほしいと思います。

8月17日新プロジェクト「おらがコンカリ PROJECT」を発足！

会員募集中

年会費：一口 3,000 円

現会員 112 名

連絡はコンカリーニョへ

TEL/FAX 011・615・4859

E-mail concarino@mx6.et.tiki.ne.jp

座談会 総合学習で学校再生を

【出演者】

東札幌小学校教員 福原秀貴さん

上砂川中学校教員 加藤友子さん

中学校3年生 伊藤元さん

同 3年生 武田亘倫さん

小学生 浅野目千景さん

父母 吉田恭子さん

同 河野由美子さん

同 伊藤規久子さん

同 浅野目祥子さん

北海道 NPO サポートセンター 関根友則さん

コンカリーニョ 斎藤ちずさん

北海道技術士センター 北越正生さん

同 五十嵐敏彦さん

さっぽろ自由学校「遊」 小泉雅弘さん

地域支援クラブ 中島正晴さん（司会）

総合学習が始まったが、学校現場にどんな変化が起きているか。総合学習をより豊かなものにするために、市民活動や地域の活動を総合学習にどうマッチングさせるか——などを話し合った。

中島（司会） 総合学習が今年から始まったのですが、始まるまでの情報がなくて、よく分からないというのが現状かと思います。最初に、どのように総合的な学習がすすめられているのか、問題点も含め、先生方や子どもたちに生（なま）のお話をさせていただいて、議論を進めていきたいと思っています。

「一人ひとりの興味・関心」のはずが？

福原（教員） 僕の学校の場合は、総合学習はほとんど学年単位でやっています。学校全体としての取り組みとしては、地域の人を呼んで、全校集会のような形でありました。あと、パソコン室が整備されたので、パソコン授業に何時間か振り分けられましたが、大方は学年単位が多いですね。

学校週5日制が始まって、僕の学校では5時間目を60分にしましたが、6時間目をつくったところもあり、子どもは昨年より忙しくなったとはいえませす。

僕が受け持っている4年生の総合学習では、社会科から発展した形でリサイクルの問題、2学期はアイヌ民族の問題に取り組んでいます。

一番心配するのは、本来子ども一人ひとりの興味・関心にもとづいてのはずなのに、学年のワクでやっていると、子ども一人ひとり、教師一人ひとりの思いはどこにいつてしまうのだろうか、ということです。

文部科学省は八つの例示をしているのですが、その八つに押し込められて、それ以外をやる自由がないのではないかと感じてしまいます。教師もその方が楽です。本来なら、個々の教師に任せるはずなのに、学年・学校単位でというのが強すぎて、結果的にリサイクルとか、国際化とかパターンが決まって、教科学習と同じようなカリキュラムのようなものができてしまう気がします。

教職員やおとなが問われている

加藤（教員） 私の学校では、「総合的な学習」が始まる前から「総合学習」としての実践を、「地域を知る」というテーマで積み重ねてきています。地域をどう見つめ、どんな課題があるのかを自分の問題としてとらえるという観点で、炭鉱閉山後の誘致企業訪問などに取り組んできました。

今度、教育課程に位置づけられることになって、教職員集団として何をやればいいのか、何をねらうのか、かなり議論してきました。そうすると今の教育の本質的な問題に向き合わざるをえない。言われている「学力」とは受験のためのものでしかない、それをつけてどうなるんだとか。かなり議論しました。結論はでなかったのですが、いままでの教科のワクにとらわれない社会認識を共有していこうと。子どもの能力を伸ばすだけでなく、私たち教職員が大人としてどう生きていくかが問われてくるだろうね、という話をしながら進めてきました。

幌加内ダムで朝鮮人労働者の遺骨収拾をしている住職さんをお話伺ったり、去年と今年是人権、環境、労働、産業いろんなフィルターを通して、上砂川を知ろうという取り組みをしています。

小グループに分かれて行くんですが、子どもたちがいろんな発見をしてくるという意味でおもしろいです。ガラス工場では、5人の正職員が全員男性で、30人のパートが全員女性でして、子どもたちが「なぜ、パートは女性ばかりなんだ」と聞いたんです。会社の人、人件費が安いからという、子どもたちが女性差別だと指摘したり。そんな自由な発想のなかで次の課題が生まれたりしています。大人も「こんな小さい地域でも差別とかいろんな問題を抱えているんだな」と突きつけられます。そんなことで、悩んだり、楽しかったり、それだけでも教育としての価値があると私は思っています。

結果を急がないで、今の教育が忘れて、「豊かに、しなやかに体験する」、間違ったり、失敗するとかができる時間にしたい。

周辺の学校を見るとそういう状況ではなくて、きちんとした計画がほしいし、結果を求めている。コマをどう潰していくかに汲々として、改革には結びつかない実態もあります。私は総合学習で、子どものどんな失敗も受け入れる大人のキャパシティーが問われていると思います。

地域と関わるということは、地域が半ばタブーにしている問題と向き合うこともあり、それは政治的なことやおとな自身棚上げにしていることが多い。それらとどう付き合っていくかは深刻な課題です。

司会 加藤さんの学校はクラス単位で行われているのですか。

加藤 その年で違います。去年は課題別で1年生から3年生の縦割りで取り組んだり、今年はクラス単位とか、臨機応変にやっています。

学年単位で小回りがきかなくなった

司会 授業時間のことをもう少し聞きたいのですが、年間にすると結構なボリュームです。東札幌小学校では全部学年単位の総合学習として行われているのですか。

福原 地域の人を呼んでの全校集会に20時間。パソコン授業に10時間くらい、学校行事に10時間などと割り振っていくのですが、それにしてもワクが決められます。残り60時間が学年に任せ、学級のワクが10時間くらいあるのですが、結果学年でやりましようとなってしまう。

僕は教科から時間を捻出して、以前からいろんなゲストティーチャーに来ていただいていたのですが、学年で総合的学習となると小回りがきかなくなって、そうしたことができなくなってしまいました。学年の100人の取り組みと学級30人の取り組みでは、内容が変わってきます。例えば、琴の奏者を呼んで、演奏の仕方を教えてもらったりは、学級だからできたが、学年ではできません。

関根（北海道NPOサポートセンター） 授業時間の割り振りは年初にはできているのですか。

福原 細かい内容は別にして、これに何時間、これに何時間というのはできています。一番問題なのは、やってみてうまくいかなかったから、こっちにしようとか、思惑と違う方へどんどん行くがそれでもいいのかというのがやりづらくなりました。

よく取り上げられるリサイクル、福祉、近くに川が流れていると「川」とお手軽に見つけられるものになってしまう。やりたくてというのが、なくなってしまう心配があります。

子どもたちのテーマの決め方

司会 新しい制度で、本当は子どもたち自身がテーマを考えてやって下さいとなっているのに、そうっていない実態があるようですね。子どもの権利条約で意思表明権があるのですが、自分は本当はこれをやりたいのに、ということがありましたら。

武田（中3） 3年生になったとき、福祉、老人とふれあう、環境、リサイクルの四つから選ぶことになって、僕は「世界と日本のリサイクルの違い」をテーマにドイツのリサイクルをインターネットで調べたりしています。

伊藤（中3） 僕もリサイクルのグループに入り、別の友だちと二人で「リサイクルの新しいビジネスの形」を調べています。そのテーマを徹底的に掘り下げ、最後にレポートとしてまとめます。

司会 どういうふうにテーマを決めましたか。

武田 プリントに書いてある中から自分で選びます。そして、人数調整して、学年の中で決まります。

伊藤（母） モデル校だったので、3年まえから取り組んでいます。

司会 感想は。

伊藤（中3） 自分でなりたい職業を決めて、現場に行って体験する職業体験はおもしろかった。僕は、ソフトの会社に行ってホームページの作り方を習ったり、警察署で指紋の取り方とか警察の仕事を教えてもらった。いろんなところに出かけていけば、いろいろ分かると思う。

武田 僕も西岡小学校で、一日教師体験をやって、おもしろかった。教師をやりたいので、夢が膨らんだし、小学生と知り合いになって、「先生」と呼ばれて、家の近くであいさつされたりした。

浅野目（小学生） 札幌の町を探検するというので、私はドコモの会社に行って、ドコモの会社について調べました。調べた結果を劇や紙芝居にして発表しあいます。昔から工場や開拓の村に行ったりしてたのですが、勉強になります。

どう課題を見つけるか

吉田（母） 総合学習のねらいとして「自ら課題を見つけて」とありますが、先生から課題が与えられてというのが多いようです。学校側としてはどう工夫しているのですか。

加藤 最初から課題が強くあればもう成功なんです。問題意識を感じられない子の問題意識をどう掘り起こしていくかが、総合学習の実践的な課題です。

はじめの年は、社会にある課題が網羅されるように、人権、環境、平和、情報にかかわることと、柱を立てて教員が提示しました。2年目は「地域・上砂川を知ろう」という大きなテーマを出して、それにつながる課題を自ら見つけることにしました。いろんな個性があり、必ずしも大人の期待する課題が集まるとは限らないが、それで進むしかないと思います。

福原 総合学習は、子どもがやりたいことをどう持つかが一番大事ですが、自由に考えてごらんといって、それを見つけられるのは一握りの子どもです。小学校は、教科から発展したものを大事にしていく必要があります。5年生を持ったとき、社会科の公害の学習で、私が水俣病を徹底的に調べて授業をしました。そのあと、子どもたちから「他の公害も調べたい」という声が出たのです。やり方とか、見方を大人が示してあげないと、子どもたちはどうしていいのかわからない。僕は、学級のなかで担任が子どもたちと話しながら、テーマを絞っていくのがいいと思う。

学校が社会とかかわるいい機会

浅野目（母） 総合学習がめざす「生きる力」とは、大人になったときにどう生きるか、どんな仕事につきたいかにつながるのだと思います。総合学習で不可欠なことは、社会とかかわることで、学校はそのパイプでいいと思っています。先生自身が社会とのかかわりがうすいなかで、総合学習は社会とかかわるいい機会だと思います。いい実践が横に広がらないのはなぜですか。

加藤 うちは変わった学校なんでしょうね。「倉本聰はなぜ…」とか「校長の教育観を問う」といったテーマは、文部科学省の八つの課題のどれにもあてはまらないけど、私たちは子どもの発想、子どもの視点で追求することに価値があると思っています。教育行政が

求めている教育像と多分、ズレがあると思う。私たちは、ズレないようにすると教育の自由が失われる、文部科学省の言うとおりにやると子どもに無理させる、という確信がありますけど、一方でズレないようにというベクトルが働くことが横に広がらない理由かなと思います。

市民活動のプログラムは？

司会 社会とのかかわりが大事との指摘がありました。市民活動の現場に行くプログラムはまだまだ少ないと思いますが。

斎藤（コンカリーニョ） 私のところは倉庫を改造した劇場施設で、総合学習が始まったせいか、今年になって視察やオファーが多いのです。厚真町の中学校が総合学習でワークショップをやってほしいと言ってきたのですが、中身も決まってないのに、行く日と時間を決めてくる。もう少し相談させてくれれば、いろいろ豊かなプログラムができるのですが。

「自ら課題を見つけ、自ら考え…」というのは、演劇の現場でずっと言ってきたことで、稽古はこの繰り返しなんです。演出するなかで、そのノウハウ、スキルが身に付いてきます。学校、親、地域の人たちのスキルアップができれば、不可能ではない気がします。

北越 我々、理科系の人間の集まりでして、自然科学に関して部分的な専門家としてサポートしたいと活動しています。昨年、教育大学の公開講座でお手伝いしたのですが、メジャーを使わない川幅の計り方を3グループに分かれてやりました。歩幅で計るグループ、手をつないで計るグループ、網で計るグループと自分たちの体験のなかから精度をもった計り方ができていました。そういうことは教室のなかだけでは、体験できないことで、これからもサポートしていきたいと思います。

学校は社会と一緒に生きていない

加藤 インターネットは便利だけど、人のかかわりのなかでしか発見できないことは、たくさんあります。〈上砂川が障がいのある人に住み良いかどうか〉を、課題とした子どもたちは、実際に目隠しして杖をついて町を歩いたのですが、「犬の糞が多くて、目が見えないと杖に糞がついて臭い」と戻ってきました。その感覚は体験しないと得られないと思います。

学校が社会と隔絶しているとの話がありましたが、子どもや教職員が社会と一緒に生きていない気がします。もう一回、いろんな人とのつながりを取り戻すことが必要です。私

たちは、いろんな課題を抱えていて「自ら考え行動する」のも大事ですけど、ゴミ問題などは人との連帯なしには解決できません。そういうことを肌感覚として分かることが大事です。

予算はわずか7万円

福原 先ほどの自由度の話ですが、学年に任された時間はまったく学年の自由です、小学校ですから。ただし、それにまつわる金銭的なものはほとんどありません。札幌市の場合、昨年秋から学校全体で年間7万円の予算が付いたのですが、額もさることながら、ゲストティーチャーは交通費実費程度というワクがあるんです。ですから、親も参加してもらって、PTAの活動費で助けてもらったりしているのです。人とお金の裏づけのないのが、ネックです。

司会 そんな予算で社会とのつながりを持つといっても、厳しいものがありますね。PTAも含め、どういう形で総合学習にかかわれるのか、もう少し話をしていきたいのですが。

伊藤（母） ボランティア参加も考えられますが、自発的にやってくれる人が出てくるか分からない。ノウハウ、スキルを持った人にボランティアでお願いはできない。そうすると金銭的裏づけがどうしても必要ですね。

PTAはいま、閉塞状況で、今までのあり方が行き詰まっています。違うあり方を考えていく必要があります。

司会 総合学習で親が学校にかかわれる可能性が出てきたと思いますが。

河野 父母の力を借りてほしいと思っても、学校は閉ざして、親の意見を求めないです。

吉田（母） 教育委員会や市役所が窓口をつくって、学校に紹介すればいいと思います。そういう体制がないと総合学習のパターン化につながるのでは。

総合学習コーディネーターの必要性

関根 先生方も多忙のなかで、協力体制が整っていないのは大きな問題です。東京では、職業体験のコーディネーターをしている人が月10万円をもらっています。外部にお願いすれば経費がかかるのは当然です。そういうことが、理解されていないのが現状です。

斎藤 お金があると優秀なコーディネーターが入って、先生たちがラクにできちゃう。逆にお金がないことが、おとなのお膳立てなしに、子どもたちが失敗できる現場をつくることにつながるという意味で、私は7万円からのスタートもいいかと思います。

小泉（さっぽろ自由学校“遊、”） 僕は、総合学習は学校のものではないと思っています。文部科学省は今までは教科書を作って、教えていくというやり方だったのが、とりあえず自分たちでなにをやってもいいと学校に投げた。それを学校は地域に投げていかないとおもしろくないと思っています。社会はいろんな世代がゴチャマゼになって初めて社会と言えて、総合学習が学校を社会化するきっかけにしてくれたらいいと思います。

入試制度が変わらないと

司会 教科の授業時間が少なくなっているため、学力低下や「ゆとり」圧迫が言われていますが、お母さんたちはどう考えていますか。

河野 「生きる力」を育てる総合教育は良いと思いますが、うちの子は受験生なので、どう評価につながるのか、気にはなります。

吉田 結局、大学入試制度が変わらないと高校・中学も変わらない。つながっている問題です。そこがチグハグな感じがします。

司会 システムの整合性が適合していかないと、やろうと思っていることが社会に根づいていかないですね。総合学習がもう始まったわけですから、いい成果を出して、システムの問題を正していく必要があります。来年度は高校で始まります。大学受験との絡みが出てきます。総合学習の成果を上げて、次のステップにつなげていくために、こんな取り組みをしたいというお話がありましたら。

加藤 入試選抜に耐えられる力が必ずしも「生きる力」ではないという、学力観の問い直しから総合学習が始まったはずなのに、また「授業時数を減らすと学力が低下する」という議論に戻っているのは、子どもに対し失礼。まわりを見ても「自ら課題を見つけ…」というおとなが皆無に近いのに、子どもに要求しても。おとなはいつも、子どもをものさしで計ろうとするが、これ（総合学習）は選抜のための評価にはなりえないと思います。

五十嵐（北海道技術士センター） 僕らが考えているのは、ただ一点。頭がいいとか、給料が高いとかでなく、生き生きと元気に生きるおとなの姿を子どもたちに見せてあげたいということです。そういうおとなが学校にかかわれるチャンスが総合学習でできたと思っ

ています。先生方と事前にディスカッションして、作っていきたいと思っています。

伊藤（中3） 僕は夏休みに塾に行って、国語や数学は3年間かける必要がないと思いました。教え方が違うんです。学校はゆっくりだけど、入試のための学力は短期間で身につけられる。

武田（中3） 総合学習は自分のやりたいことができるので、国語とかより楽しい。もっと増やしてほしい。

編集部 大変いいお話を聞かせていただきました。長時間、ありがとうございました。